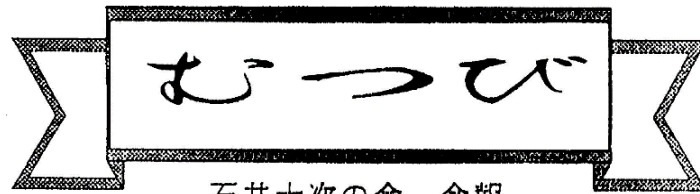


2023年
(令和5年)
10月12日



313号

幸せなワイン造りを目指して

合同会社香月ワインズ

代表 香月克公

25歳の時に日本を飛び出し、ニュージーランドで10年余りワイン造りの経験を積んだ後、独立して23年が過ぎました。

かつては、華やかなワイン業界で、世界の品評会に優勝し有名な醸造家になることを夢見て頑張っていた時期がありました。

世界のワイン産業は、資本主義経済における大量消費社会に伴い、効率、生産量重視のワイン造りが主流となっています。

そんな中、香月ワインズは、世の中の流れとは真逆の、昔ながらの自然と向き合い、自分たちが幸せだと思える、マイペースで質素なワイン造りを目指して日々を過ごしています。

そもそも、そのような考えがどこから来て今の香月ワインズのワイン造りが始まったのか。

ニュージーランドに渡った当初は、ワイン造りを目指していた訳でもなく、バックパッカーとして、リンゴ畑や、キウイフルーツ畑に住み込みで、季節労働者として生活をしていました。

そしてたまたま、ブドウ畑に辿り着き仕事をいただいたのです。

その当時のニュージーランドは、世界のワイン市場から注目を集め始め、人気が急上昇していた時期でありました。

目の前に起こっている全てが新鮮かつ刺激的で、毎日多くを学びながらワイン造りに励みました。そこから数年がたつと、世界のニュージーランドワイン需要がどんどんと高まります。

労働者不足に陥り海外から多くの季節労働者を受け入れるようになっていきました。

ワインを生産すれば直ぐに売れてしまう状況に目を付けた投資家たちは、牧場を

買収しブドウ畑開拓に乗り出したのです。

ついには同国のワイナリーは、世界企業にどんどんと買収されていきグループ会社と化していきました。

そんな状況になる早い段階で違和感を感じた私は、友人の計らいで古いワイン醸造の歴史を持つドイツへと渡りました。

そこで体験したことは、助け合いの精神が残る昔ながらの質素なワイン造りでした。家族全員で助け合いワインを造るのです。

お昼は、お母さんと娘さんが一緒に作ってくれたお料理を皆でテーブルを囲んで食べる。そんなシンプルなワイン造りが胸にぐさりと刺さったのです。

もちろんドイツであれ世界では、主流となるのは効率化された、最先端の技術を駆使した量産体制のワイン造りです。

しかし、このドイツの田舎町で質素なワイン造りに出会ったのです。

日本では24時間、365日、休まず営業しているお店があり、いつでも棚には沢山の食べ物が並んでいます。それを維持するには量産体制で安定した出荷ができる物造りが必要です。

我々は皆、少なからずそのようなお店の恩恵を受けながら生活しているのも事実。よってどちらが良い悪いではなく、どちらにも偏り過ぎることなくバランスが必要だと思います。

ただし、世界で共通して言えることは、大量生産の先には価格競争がエスカレートして、一次産業である生産者が必ず苦しむことになるのは目に見えています。

過去3年のコロナ禍を経験した後、消費者の安心安全な食への関心が高まっています。

そして、香月ワインズには、少量生産の無添加ワイン造りに共感し、国内外から若者たちが集まっています。

かつて、石井十次先生が多く若者に手を差し伸べて、夢と希望を与えて来られたように、私はこのワイン造りを通して、微力ではありますが、次世代に少しでも夢や希望を与えられるようなワイナリーでありたいと思っています。

石井十次、按摩を教えた盲目の孤児の召天を見送る

—岡山孤児院日誌から—

明治 36 年 8 月 1 日の岡山孤児院日誌には、十次が「本月ヨリ石井、書記代理ヲナス」と記載している。岡山孤児院の玄関に隣接する事務所には、いつもなら岩村真鉄や小野田鉄彌などの事務員がいて、訪問者の対応をしたり、送られてくる寄附金や郵便物の整理と記録に当たっている。孤児院日誌をつけるのも重要な任務である。「書記代理」とは、事務員が出払って不在なので、代わりに孤児院長の十次が事務員の役割を引き受け、日誌をつけたという意味である。

岡山孤児院は 7 時の早朝集会から始まる。8 月 3 日（月曜日）は晴。早朝集会が終わって、事務所で仕事を始めた十次のもとに、入所中の一人の孤児の訃報がもたらされた。十次は日誌に次のように記録した。

「一、朝集会、柿原政一郎君、豊臣秀吉ニツキテ講話。

二、活動写真ヲ携帯シ、柿原政一郎、後藤兼吉、佐藤弘之ノ三氏、本朝九時二十分ノ列車ニテ出発。

三、盲児・A 児 死亡。」

A 児について、十次は日誌のなかで、次のように説明している。

「A 児ハ肺結核ノタメ、昨年七月五日ヨリ就床セシガ、終ヒニ本朝永眠セリ。A 児、昨朝、予（十次のこと）ヲ呼ンデ遺言シテ曰ク、

『長イ間御厄介ニナリマシタ。モー私ノ死ヌルノモ近ヅキマシタガ、私ガ死ニマシタナラバ、私ノ机ノカギガコノ布団ノ下ニアリマスカラ、ソレデ机ヲアケ、其ノ中ニアル銀行ノ通帳ヲモテ、貯蓄金ヲ受取り、ソレヲ孤児院ノ基本金ニ寄付シテクダサイ。外ニハ何モ言フコトハアリマセヌ』

マタ、看護婦吉田いの姉ニ向ッテハ、

『私ガ就床イタシマシテカラ、モー一年ニナリマスガ、実ニ長ラク御親切ナル御看護ニ預リマシタ』

ト礼ヲ述べ、且ツ曰ク、

『神様ノ所ニ往ケバ楽ニナリマスカラ、モー早く死ンダ方ガヨロシウゴザリマス』

ト、死ニ至ルマデ精神ニ異常ナカリキ」

A 児は、明治 31 年 6 月 20 日、岡山市警察署から孤児院に紹介された盲目の孤児であった。生国は信濃国（長野県）諏訪の近在らしかったが、孤児であった。幼くして善光寺参りの遍路に貰われ、大阪でまた越後獅子舞いの親方に貰われ、四国・中国を越後獅子を舞わされながら、岡山にやってきた。

ところが、不幸にして眼病を患い、盲目になってしまった。越後獅子舞いの親方は、A 児が盲目になると、無情にも A 児を岡山に残したまま姿をくらましてしまった。寄る辺のない A 児が岡山市中を徘徊していたのを巡査が見つけて、岡山孤児院に連れてきたのである。

十次は A 児を孤児院に引取り、盲目でも独り立ちができるように按摩を教えた。若き日の十次の「目明き按摩」の経験を活かしたのである。

十次は、その日の日誌を次のように結んでいる。

「入院後ハ按摩ヲ教へ、ヤヤ熟練スルヤ直チニ笛ヲ吹キテ市中ヲ巡リ、毎月自ラ儲ケタル内ヨリ食料ヲ払ヒ、余リアレバコレヲ銀行ニ預ケタリシガ、死後其ノ預金帳ヲ調べシニ〇〇〇〇アリキ。由ツテ之レヲ其ノ遺言ニ従ヒ本院基本金ニ寄附セリ」

苛酷な運命を恨むこともなく、前向きに懸命に生きた A 児の召天を、十次は心から祝福したことであろう。

（参考：岡山孤児院日誌 明治 36 年 8 月）

編集委員 石川正樹

川上典子様（柿原政一郎の孫）からのお便りによると、「ココの像」は昭和32年に、大原総一郎（大原美術館理事長）から茶臼原の石井記念友愛社に寄贈されました。芸術的価値の高い貴重な「ココの像」は、なんと当時、静養館の前に長い間雨ざらし状態で置かれていました。それも石井十次の胸像にとって代わる形で。

実は、「ココの像」が寄贈・設置される以前は、台座には石井十次の胸像が置かれていたのです。この台座の設置者は十次の娘婿である画家・児島虎次郎。

しかし、戦争が始まり石井十次の胸像は供出され台座のみが残る形に。そこで、虎次郎が設置した本物の台座（本来は十次胸像のためのもの）には、本物の宝物が相応しいと「ココの像」が設置されたのです。



石井十次資料館

私は、先の「第23回石井十次セミナー※8月27開催」の折に児島塊太郎氏（児島虎次郎の孫・陶芸家）からお話を伺う機会を設けました。塊太郎氏は購入・寄贈の真相を知る方のひとりです。

塊太郎氏によると・・・「ココの像」は大原総一郎が購入・寄贈した本物そのもの。彼は大原美術館の運営を担い、収集ジャンルを大きく広げた功績者。児島虎次郎が購入した作品ではない、と。

当時は、まだ終戦後であり「ココの像」などを収納できる資料館を建設することは夢のまた夢。

それから、時を経て昭和54年に長津久男氏（柿原政一郎の次女・みち子の夫）やご支援の方々のご協力により念願の石井十次資料館がようやく建設されました。

「ココの像」が無事に資料館に収納された時には、長津久男氏も川上典子様も、やっと安堵されたそうです。※資料館に収納してある現在の「ココの像」台座については～その3にて述べさせていただきます。

このように「ココの像」は日本でも非常に人気の高い印象派の画家ルノワールの真作です。

そして、大原総一郎氏の購入・寄贈により茶臼原の石井記念友愛社・資料館に収納してあることも真実なのです。

ルノワール作「ココの像」は、資料館でこれまで信頼や友情の物語をいろいろと見つめてきました。そして、これからも。皆様のご来館を心からお待ちしています。

参考資料 川上典子様（柿原政一郎の孫）からの手紙

（編集委員 徳地順子）



方舟館からの
お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

石井十次資料館の案内看板について

このほど石井十次の会の支援により、資料館近くの交差点（二カ所）に案内看板が設置されました。標識としてだけではなく、資料館の存在をお知らせする役割をも担うものです。

七月の幹事会で、看板にかかる費用を支援することが承認され、この度の設置が実現しました。会員の皆様にご報告とお礼を申し上げます。

石井十次の会 事務局

★11月号の通信発送作業は、11月8日（水）9日（木）いずれも9時からです。

*紙面の都合により、新会員及びご寄付をいただいた方につきましては次号でご紹介させていただきます。



この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

☎ 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会 TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭は、綾町のワイン醸造家香月克公様から玉稿をいただきました。ありがとうございました。なお、先月号のこの欄にて玉稿→玉禍と記載してしまいました。お詫び申し上げます

（編集委員 徳地 順子）